

加藤賢郎

1927年、岩手県白田村に生まれる。1970年、東京大学法
学博士。同大学出版部編集者を経て、1978年名古屋
大学法学部助手、1980年一橋大学社会学部助手を経て、
1981年から一橋大学社会学部助教授、専攻は政治学で、
ヨーロッパの政治史や近代国家論を研究。「社会衛生
学から考える」（共編著、現代書房、1977年）、B・ジュー
ンガ「日本主権論」（著訳、朝倉の水書房、1983年）
のほか、ヨーロッパの新聞雑誌「名古屋大学」法政
論議（50-55号、1978-1980）、「1982年アービー」の原題と解
題（1981、83、84号、1982年）などの論文がある。

国際的ルネサンス
P112の全般的危機論
批判 1981

1986年2月20日 第1版第1刷印刷
1986年3月1日 第1版第1刷発行 定価2000円

著者 加藤 香 郎
発行者 山 根 稔

発行所 株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
板橋区 口 8-36582 番
電話・東京 (292) 0481 (代表)
郵便番号 101

© Tetsuro Kato, 1986 ミツク印刷・協栄製本

ISBN4-250-86006-X

換言するならば、ここでもまた、問われているものは、制度としてばかりではなく、運動として、思想として、また、価値としての、民主主義なのである。

(1) 前述した、ユーロ・コミュニズム各党の大会決定における、国際関係、外交政策、国際共産主義運動の項を、比較参照のこと。「現代的タイプのエスモボリタニスム」という概念は、E・ベルリングエルが、「歴史的妥協」の提案にあたって、グラムシから抽出したものである(ベルリングエル、大津真作訳『先進国革命と歴史的妥協』、合同出版、一九七七年、三〇頁、ラヨロ、前掲訳書、二五四頁、参照)。但し、このレベルでは、NATOへの対応、核問題、スペインのEC加盟問題やアフガニスタン問題への対応等で、西欧諸国共産党間でもさまざまな見解の対立が、直接的に表現される。また、多国籍企業への対応、国連の位置づけ、「第三世界」への援助の問題、「外国人労働者」問題など、多くのより深く解明・政策化すべき問題点が、残されている。

左の論文は、唯物論研究会 唯物論研究員会、
汐社、一九八一年初めの私の全般的危機論を
批判してある。関心のある方は、
不破哲三の著書『私の全般的危機論の
経緯』を汐社、一九八一年と出版
してください。
加藤 節

VI 現代世界認識の構図

— 「全般的危機」論の批判的検討 —

一 はじめに — 時代認識としての「全般的危機」論

今日、「世界史の現段階」を唯物論的に把握する視角は多様でありうるが、これまでのマルクス主義的
社会諸科学で広く受け入れられてきたアプローチとして、いわゆる「全般的危機」論をあげる事ができる。
ここでいう「全般的危機」論とは、現代世界を「四大矛盾」から成る体系として捉え、ここから「三
大革命勢力」を抽出して「世界資本主義の全般的危機」と総括し、その現象形態と発展段階を問題にする
ような認識枠組である。

「全般的危機」論が、数十年にわたって「権威」をもち、今日なおソ連邦・東欧諸国やわが国で影響を
残しているのは、それなりの理由がある。

一つには、このアプローチが、資本主義世界に焦点を合わせた認識枠組ではあるが、いわゆる「現存す
る社会主義」を不可欠の構成要素とした時代認識となっており、同時に「第三世界」をも視野に入れた、
文字通りの世界像であるからである。② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾

移行の開始と非西欧社会の世界史への能動的参入を視野に収め、唯物史観の想定した人類史の継起的・段階的發展が前資本主義・資本主義・社会主義の諸社会構成体の共時的併存という過渡的形態をとっている事態を總體的に認識する枠組として採用されたものが、「全般的危機」論なのである。

いま一つは、かつての「マルクス・レーニン主義」の時代に、世界認識の中核的主体が「一枚岩の統一」をもつ国際共産主義運動のレベルに設定されてきたため、「資本主義の全般的危機」という規定が国際共産主義運動の一致した見解であつたがきりで、マルクス主義理論による真理的認識と同義に扱われてきたからである。

しかし、今日、「全般的危機」論はさまざまな角度からの批判をよびおこし、その内容的理解は「混沌とした状態」にあるといわれる。おそらくそれは、認識対象としての世界史の展開そのものがよびおこしたもので、「全般的危機」論は、第二次世界大戦以降の「資本主義世界」での生産力発展や多国籍的生産統合・帝国主義的世界同盟の形成、「社会主義世界」における経済建設の困難・政治的民主主義の未成熟から国家間戦争にいたる矛盾の顕在化、ようやく国家的独立を達成した「第三世界」の内部分化や従属的發展の問題、等々をどのように対象化しうるかという問題をかかえているのである。

また、マルクス主義の理論と運動が、「スターリン批判」から「中ソ対立」を経て「ユーロ・コミュニズム」をも生み出すという、かつては想定されていなかった展開を示し、国際共産主義運動の分化と各国の運動の自律化が進み、共産主義運動とマルクス主義理論との間の関係にも大きな変化が生まれた。今日では、マルクス主義理論自体が多様な発展を示しており、それは、「スターリン批判」にはしめる「再検討」の段階から、六〇年代後半〜七〇年代の「ルネサンス」を経て、八〇年代における「マルクス主義理論のヨーロッパ的再構築」まで進んでいる。そこでの現代世界の対象化は、「全般的危機」論の

射程をはるかに超えて、人間と自然との関係の根本的問い直しや「国家の死滅」社会への再吸収へと広がり、また、諸個人の「日常生活」や「生活過程」における人間解放の問題へと内在してきている。

小論は、こうした問題状況を念頭において、現代世界認識の新たな構図を探るために、ひとまず「全般的危機」論の内在的批判を試みる、一つの研究ノートである。

- (1) 哲学者芝田進年氏は「核兵器による世界史の終焉の危険」を現代認識の基軸におく(『現代の課題——核兵器廃絶のために』、青木書店、一九七八年)。社会学者庄司典吉氏は「生産力成熟視角」の復権を主張する(『社会運動と変革主体』、東京大学出版会、一九八〇年)。歴史学者江口朴郎氏は「人民の自発的な主体性」から世界史をみよとする(『世界史における現在』、大月書店、一九八〇年)。わが国経済学の「資本主義世界」分析には、①「全般的危機論」の他に、②「帝国主義論」独占論の接近、③「新段階説」移行期論、④「宇野兼徳的接近」現状分析論の諸視角があるという(高須賀義博編『独占資本主義論の展開』、東洋経済新報社、一九七八年)。
- (2) ここでの「時代認識」世界史の意味については、拙稿「コミンテルンの綱領問題——世界政党的イデオロギー的統合」(『西、名古屋大学』『法政論集』第八〇〜八三号、一九七九—八〇年、参照)。
- (3) 「全般的危機」関連文献は膨大な数にのぼる。さしあたり、それぞれ異なった視角からの文献・論争整理として、杉本昭七『全般的危機の論争史』、『新マルクス経済学講座』第三巻、有斐閣、一九七七年、浅原正基『日本における全般的危機理論の若干の問題について』、『ソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所編』『資本主義の全般的危機の深化』、協同産業出版部、一九七七年、川端正久『世界政治と全般的危機論』、日本国際政治学会編『国際経済の政治学』、有斐閣、一九七八年、参照。なお、「スターリン批判」(一九五六年)と「中ソ対立」顕在化以降、国際的には、「全般的危機」論はソ連邦・東欧圏やわが国マルクス主義を除いてはほとんど使用、討論されず、術語として使われても国際情勢分析上の「枕言葉」である場合がほとんどである。
- (4) 拙稿「ユーロコミュニズムの射程」、『マルクス主義研究年報』一九七八年版、合同出版、一九七八年、参照。

(5) E. Laclau & C. Mouffe, *Socialist Strategy—Where Next?*, in *Marxism Today*, Jan. 1981, pp. 17-22. ここでの「コペルニクス的革命」とは、第二インターナショナルからコミンテルン・スターリン時代に継承された「経済主義」を排し、レーニンからグラムシが継承した「政治の優位性」の主張をも発展・超克した、「民主主義の新しい概念」にもとづく「解放された自主管理の社会」を構想するものである。

二 「全般的危機」論の形成と構造

「全般的危機」論とはいかなるもので、どのような性格の認識枠組であろうか？ 実は、このこと自体が長く論争点となっており、多くの論者は、それぞれの「全般的危機」概念を提出することで自己の時代認識・世界像を語ってきた。そこで、ひとまずこのアプローチの生成・展開過程を概観することにより、「全般的危機」論の基本的構造をみてみよう。

1 レーニンの「世界的危機」と「革命的危機」

第二次世界大戦後、「資本主義の全般的危機の第二段階」が定式化されてくるさい、このアプローチの起源はレーニンに求められ、そのことによって「スターリン批判」以降も一定の「権威」をもちえた。その論拠となっているのは、(1)レーニン『帝国主義論』は、「死滅しつつある資本主義」を述べており、この規定はスターリン『レーニン主義の基礎』で「帝国主義の三大矛盾」(①資本対賃労働、②帝国主義列強間、③帝国主義対殖民地・従属諸国)から「解説」されて以来、「資本主義の全般的危機」と同義に扱われてきたこと、(2)レーニン自身、第一次世界大戦勃発以降、「最大の歴史的危機」「世界的危機」「国際

的危機」「世界資本主義全体の危機」「世界的な革命的危機」等々を述べていること⁽³⁾である。

(1)については、「死滅しつつある資本主義」を「三大矛盾」から導いたのは、レーニン自身ではなくスターリンなのであるが、その単純明快さのゆえか、これに「体制間矛盾」(資本主義対社会主義)を加えた「四大矛盾」論が、今日でも「全般的危機」論の骨格を形成している。周知のように、レーニンは、二〇世紀初頭の世界資本主義を「五つの基本的標識」(①生産と資本の集積、②金融寡頭制、③資本輸出、④国際的独占団体の世界分割、⑤領土的分割完了)から「帝国主義段階」と規定し、その「歴史的地位」を、①独占資本主義、②寄生的・腐朽的資本主義、③死滅しつつある資本主義、と特徴づけた。ここでのレーニンには、たしかに「資本主義の三つの矛盾」(①社会的生産と私的占有、②富と貧困、③都市と農村)という「矛盾論」的見地はみられるが、帝国主義の段階的特質を導く基調はあくまで資本の集積・集中・独占(金融寡頭制)の論理であり、「死滅しつつある資本主義」とは、資本の独占的蓄積の総結果としての生産の「社会化」にはかならず、「過渡的資本主義」「社会主義へ移行しつつある資本主義」ともいわれているものである。③「死滅しつつある資本主義」は、社会主義への世界的移行の物質的基礎の成熟を示す規定として一つの時代認識たりうるが、「三大矛盾」におきかえられるものではないし、「危機」の規定とも異なり、「全般的危機」論に直結してゆくものではない。

(2)のレーニンの「世界的危機」等々は、「全般的危機」論の先駆とみなしうるであろうか？ レーニンのこうした表現の特徴は、第一に、「全能の舞台監督」としての帝国主義世界戦争(第一次世界大戦)の存在、第二に、その結果としてのヨーロッパにおける「革命的危機」の存在と「革命的民族主義的東洋」の「全世界の革命運動全体の循環」への参入、第三に、ロシアに始まったプロレタリア革命の「世界革命」への拡大(共産主義運動とソヴェト権力)のイメージ、と分かちがたく結びついていることである。

そして、その前提は、レーニンの「革命的危機」ないし「全民族的危機」という「危機」概念であった。レーニンの「危機」規定は、よく知られているように、①下層がいままでどおりに生活することを望まないこと、②上層がいままでどおりに支配し統治することができなくなること、を要件としている。レーニンの「世界的危機」規定は、一国的レベルの「革命的危機」イメージを基礎とし、それを「世界革命」のレベルに拡充したものと考えられる。

例えばレーニンは、コミンテルン第二回大会での報告（一九二〇年七月）で、第一次世界大戦の結果としての世界情勢の分析を行ない、「世界的な革命的危機」「世界的危機」「全世界で最大の革命的危機」を導出するのであるが、そこでは、①大衆の耐えがたい生活状態、②資本主義世界とくに戦勝国での経済的・政治的崩壊、が「世界革命の二つの条件」とされている。これは、数ヶ月前に『共産主義内の「左翼主義」小児病』で述べた「全民族的危機」概念（プロレタリア革命の成功の二つの条件）としての、①抑取され抑圧されている大衆がいままでどおりに生活できないことを自覚し変更を要求すること、②抑取者がいままでどおりに生活し支配することができないことの世界情勢論への適用と考えられるのであり、「世界的危機」とは、ロシア革命の「世界革命」への拡大を可能にするような、世界的な、少なくともヨーロッパのいくつかの国々での、「革命的危機」情勢の存在を前提にしていたのである。この意味で、レーニンの「世界的危機」は、時代認識である以前に状況認識であった。また、国家を単位とした国際関係（国家間関係）的イメージにとどまるものではなく、「すべての資本主義国内部でも、それらの国相互のあいだでも、あらゆる資本主義的矛盾が驚くほど激化したこと」を基礎とした、総体的社会認識であった。

戦前のレーニンの、「革命的民族主義的東洋」が「世界資本主義全体の危機にたちらずにはおかない

ような発展に引き入れられた」という表現¹³も、「革命的危機」においてさえブルジョアジーにとって「絶対に活路のない情勢というものはない」という把握¹⁴に照らして、国際情勢の「ある種の均衡」と「反革命的帝国主義的西欧」での「革命的危機」情勢の退潮を認めての、「世界的危機」についての循環論的アプローチと考えられる。

ここでの焦点は、レーニンの「危機」概念にあり、それは、数十年にわたる「慢性的危機」「万年危機」のイメージとも「全般の危機」という断末魔のひびきのある基本理論¹⁵とも区別されて、資本による「安定の諸契機」「調整手段」との対抗で、また変革主体の成熟度をも視野に入れて、定立ないし非定立されるものなのである。

2. 初期コミンテルンの「没落期」と「相対的安定」

ロシア革命後の数年間（特に一九二〇年末まで、最終的には二三年秋まで）、各国における「革命的危機」の存在は、ロシア革命のヨーロッパ（特にドイツ）革命への直接的拡大の期待と相まって、当時のマルクス主義者にとって、自明のものであった。したがってまた、レーニンが「世界的危機」と呼んだような世界情勢認識も、レーニン独自のものではなく、一九一九年三月に創立された共産主義インターナショナル（コミンテルン）の指導者たちによって共有されていた。「危機の時代」（トロツキー）、「資本主義の内部崩壊の時代」（ブーリン）、「世界的危機」（ヘルンレ）、「新しい世界」（バンホック）、「終局的危機」（ボルデイガ）、等々がそれである。もとより、それぞれの論者の「世界的危機」を基礎づける論理は、それぞれに異なっていたのではあるが。そして、コミンテルン創立大会（一九一九年）の決定自体も、「新しい時代が生まれた、資本主義の解体、その内部的崩壊の時代が、プロレタリアートの共産主義革命の時

現代世界認識の概図

代が」と、「最後の決戦の時期」をうたっていたのである。

しかし、一九二二年の第三回世界大会において、国際政治の「ある種の均衡」、「戦後の革命運動の第一期はかなりの程度終結したと思われる」という認識が生まれてくると、「資本主義が存続するかぎり、循環性の変動は避けられない。それは、青年期や成熟期の資本主義に伴ったように、臨終期の資本主義にも伴うだろう」「世界革命は、直線的に進行する過程ではなく、資本主義が持続的に瓦解してゆき、日常の革命的な侵蝕活動がときおり先鋭化し、集約されて、激しい危機となって現われる時期である」という「世界的危機」の循環論的把握があらわれ、これは、ソ連邦におけるネップの採用と「国社会主義建設を方向づけることになる。同時に、客観的に革命的な経済的政治的情勢が存在しており、鋭い革命的危機（大ストライキ、植民地の蜂起、新たな戦争、さらには国会の重大な危機等々、どうかたちをとらうと）がまったく突然に生じる可能性があるにもかかわらず、労働者階級の多数者はまだ共産主義の影響のもとにおかれていない」という「危機」の一国的かつ主体的な把握（革命的危機）が再生することにより、第四回大会の労働者統一戦線・労働者政府論に連なる「大衆のなかへ」「多数者獲得」戦術が採られることになる。

一九二二年の第四回世界大会は、その時代認識として「資本主義の没落期」を定式化した⁽²⁾が、同時にそのもとでの「循環性の変動」を予測し、レーニンの最後の演説は「退却の可能性」を強調した。この後者の側面は、第五回大会（二四年）の「民主主義的平和主義的局面」、第五回拡大執行委員会総会（二五年）の「資本主義の一時的部分的相対的安定」の承認として具体化され、この状況認識からコミンテルンに所属する各国支部に各国共産党の「ボリシエヴィキ化」が推進されることになる。一方、前者（没落期）の方は、「世界資本主義の危機」「資本主義体制の解体期」「世界的な経済的および政治的危機」「資本主義

の最後の危機」等々と同義のものとして、後の「全般的危機」論へと受け継がれてゆく。この局面ですでに、「衰退しつつある資本主義的国家体系がおちいった混沌状態のなかにあつて……地球の六分の一はソヴェトの権力のもとにある。ロシア・ソヴェト共和国が存在していることそのものが、ブルジョア社会を弱める恒常的要素として、また世界革命の最も重要な要因として、作用している」という、ソ連邦の存在そのものから「資本主義の没落」を導出する論理があらわれていた。

こうして、ロシア革命の勝利とコミンテルン創設の時期には、一国的なもの世界的なもの、経済的なものと政治的なもの、支配階級の支配の困難に関わるものと被抑圧大衆の政治化に関わるもの、状況的なものと時代的なもの、等々のアマルガムとして渾然一体を成していた「危機」の概念は、ほぼ一九二〇年代半ばには、新たな定式化を迫られることになった。この局面で、「資本主義の没落期」に代わるものとして採用されたのが、「全般的危機」(die allgemeine Krise) 規定であつたと考えられる。

3 フーバーリンによる「全般的危機」論の形成

アルクス以来の「全般的恐慌」概念とは区別される、経済的のみならず政治的・イデオロギーの意味をも含んだ「全般的危機」という術語は、それ自体としてはすでにコミンテルン創立大会のオブロンスキ(オンスキ)演説にみられるし、一九二二年のブルガリア共産党綱領草案にも見出される。しかし、今日にまで受け継がれる「全般的危機」概念の先駆者は、フーバーリンであり、彼がコミンテルン第四回大会に提出した「共産主義インターナショナル綱領(草案)」に題題が求められるであろう。

フーバーリンは、一九二二年秋のこの「草案」で、独占資本主義に帝国主義段階の主体としての「国家資本主義トラスト」とこれに対抗する「二大主要勢力」としての資本主義諸国労働者と植民地被抑圧人民を

抽出し、「戦争の諸結果と資本主義の解体の開始」の項で、④戦争の出費と生産力破壊、⑤世界交通の破壊、⑥植民地予備軍の離脱、⑦減少した社会的所得の再配分、⑧帝国主義基頭グループ間の抗争激化、⑨植民地と本国との間の闘争激化、⑩階級闘争の激化、⑪資本主義制度の絶対的不安定、を述べた。「全般的危機」は、以下のような文脈に用いられる。

⑨植民地・半植民地諸国が帝国主義的しめつけの弱化を利用しより大きな経済的自立性を獲得している限りで、帝国主義経済体制は本質的な変化をこうむっている。この事情は、本国の繁栄の基礎を揺りくずし、全般的危機を激化させている。

戦時と戦後期の上述した基本的諸事実〔⑥⑦⑧〕のすべては、社会的総所得の減少となって現われている。

⑩社会的総所得の減少は、所得の再配分をめぐる闘争を激化させている。⑥さまざまな金融基頭グループ間の競争において、⑦植民地と本国との闘争において、⑧さらにまたブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争の領域においても。そのさい、戦時に中間層がとくに被害をこうむったところでは、中間層はプロレタリアートに同調する傾向がみられる。

⑪全体としてみて、戦後における資本主義の状況は、資本主義の生活のあらゆる領域——経済的、政治的、社会的、さらにはイデオロギイ的・文化的にも——における絶対的不安定状態と特徴づけることができる。なぜなら、全般的危機を背景として、ブルジョアジーの深刻なイデオロギイ的解体の明らかな徴候、すなわち宗教、神秘主義、オカルティズムその他の回帰が現われ、ブルジョア文明の来たるべき没落を明白に示しているからである。

この「全般的危機」の規定によって、「全帝国主義戦線の最も弱い部分」であるロシアの十月革命が導き出されている。

右のフーバーリン「草案」は、第一に、経済・政治・社会・文化の「全生活領域の危機」としての「全般

的危機」の把握、第二に、「三大矛盾の激化」〔⑥⑦⑧〕による「全般的危機」の導出と「二大革命勢力」の抽出、において、今日の「全般的危機」論の原型たる位置を占めている。しかしまた、後のスターリンや第二次世界大戦後の「全般的危機」論との対比でいえば、いくつかのフーバーリン的特徴をももっている。

すなわち、第一に、この「社会的総所得の減少」論が、この期のフーバーリン特有の「戦時経済ニマイナス拡大再生産ノ均衡の破壊ニ資本主義解体」という終末論的論理と、帝国主義段階の矛盾を資本蓄積の内的論理よりも「国家資本主義トラスト」間競争にみる国際関係的視点でくみだてられていること、第二に、「三大矛盾」という把握からも明らかなように、「全般的危機」の始点は第一次世界大戦であり、ロシア革命は、「鎖の最も弱い環」における「全般的危機」の端緒的帰結として位置づけられ、かつ「世界革命」への直接的拡大が展望されていること、第三に、この期のフーバーリンはなお「攻勢理論」の立場でドイツをはじめとしたヨーロッパ諸国の「革命的危機」の存在を前提としており、この意味では時代認識である以前になによりも状況認識であったこと、などである。彼が、この「草案」の報告にあたって、「ドイツに革命がおこれば諸国の配置図は一変する」という観点から「世界綱領」における資本主義諸国の類型化に反対してレーニンの批判を招いていたことも、これを裏書きしている。しかし、この二三年段階では、フーバーリン「草案」は「ドイツ共産党綱領草案」等と並ぶコミンテルン「世界綱領」への個人的「草案」とどまり、したがって「全般的危機」概念も、影響力をもつことはなかった。

二三年秋のドイツ労働者政府の敗北と二四年一月のレーニンの死を経て、フーバーリンが、「攻勢理論」を棄てて「資本主義の相対的安定」を認め、「一国社会主義建設」をめぐるスターリン派とトロツキーとの抗争においてスターリンの側についた、二四年のコミンテルン第五回大会段階において、「全般的危機」

は、ブハーリン「草案」をもとにした大会決定としての第五回大会「綱領草案」に、明示されることになる。

この第五回大会「綱領草案」では、ブハーリン「草案」の前述した「全般的危機」規定をほとんどそのまま残しつつも、いくつかの重要な修正がほどこされている。その第一は、ブハーリン「草案」において、「帝国主義」段階規定と「全般的危機」規定を媒介する位置を占めていた「国家資本主義・トラスト」についての記述が、ドイツ共産党などからの批判を受け、全文削除されたことにより、「危機」を基礎づける論理は各人各様でありうることになり、「三大矛盾の激化」がそれ自体として「全般的危機」を基礎づける論理としてクロス・アップされる可能性を孕んだことである。

第二は、ブハーリン「草案」では、「全般的危機」から直接ロシア革命と「世界革命」を導く構成になっていたものが、第五回大会「綱領草案」では、その間に「資本主義の解体過程は、この過程に現われてきた資本主義制度の部分的復興の傾向、また生産力がさらに発展する傾向によって、廃止されはしない」という一節が挿入され、「全般的危機」の内部に「相対的安定」を組みこみうるように再編成されたことである。

第三は、ブハーリン「草案」では「反革命勢力(社会民主克)」とされていた一項が、「反革命勢力(社会民主党、フランスム)」という項に拡張されて、「『正常な』資本主義のもとでは通常用いられないこれら二つの方法は、資本主義の全般的危機の徴候であると同時に、革命の前進を阻止するものである」という一文が追加されたことである。

これらの修正によって、「全般的危機」は、「革命的危機」という一国的・状況的危機概念とは切り離され、また「帝国主義」概念からも相対的に自立した、一つの時代認識となったのである。

4 スターリンとコミンテルン綱領による確立

それでは、今日「全般的危機」論を批判する論者たちから、その創始者とみられている、スターリンの役割は何であったのだろうか。

結論的にいえば、第一に、ブハーリンのものである「三大矛盾・三大革命勢力」論を、レーニンの「死滅しつつある資本主義」規定と接木し、「帝国主義の三大矛盾」にまで仕立てあげたこと、第二に、論文「二つの陣営」(一九一九年)以来の「体制間矛盾」論を「三大矛盾」に加えて「四大矛盾・三大革命勢力」に再編成したこと、第三に、「全般的危機」を「十月革命が勝利して世界資本主義体制からソ連邦が離脱した結果」と位置づけることにより(二七年、ソ連邦共産党第一五回大会報告、「体制間矛盾主導」を明示し、「全般的危機」の始点をロシア革命としたこと、第四に、これを根拠づける論理として「ソ連邦の離脱」による「市場問題激化」＝「資本主義世界市場の空間的狭隘化」を導入し、ブハーリン的「全般的危機」概念には含まれていた「全生活領域の危機」を経済主義的・還元主義的な国際経済論に矮小化し、「中間層の分化」の問題を捨象していったこと、第五に、「ソ連邦の存在」と「市場問題の激化」による「体制間矛盾」の規定性を、「資本主義の安定は、ますます小さくなったものになり、不安定なものとなりつつある。……ヨーロッパでは明らかに新しい革命的高揚の時期に入っている」という「三大矛盾激化」論へと反射的に波及させ、コミンテルンのいわゆる「第三期＝安定の前夜＝革命的高揚」の論拠としたこと、またそれによって、一九二八―二九年にはブハーリンを「右翼的偏向」として失脚させ、コミンテルン各支部に各国共産党に「ソ連邦擁護」と「社会フランスム」論的左翼主義戦術を強要する政治的機能を「全般的危機」論に付与したこと、以上である。

「全般的危機」論が、概念として確立され、世界的な「マルクス・レーニン主義」の「公認理論」となるのは、一九二八年、コミンテルン第六回大会における「世界綱領」の最終的採択によってである。

ブハーリンを中心に新たに起草しなおされた草案をもとに、スターリンをはじめとした多くの論者の公開討論によって決定された、この「世界綱領」は、第一に、その「序論」冒頭で「帝国主義時代は死滅しつつある資本主義の時代である。一九一四年から一九一八年までの世界戦争と、この戦争によって開始された資本主義の全般的危機」と述べることにより、「全般的危機」の始期は一応第一次世界大戦としたものの、「死滅しつつある資本主義」と「全般的危機」とを短絡させた。

第二に、第二章を「資本主義の全般的危機と世界革命の第一段階」と名づけ、「世界史は、その新しい発展段階、資本主義体制の長期にわたる全般的危機の段階に入った」とすることによって、「全般的危機」の時代認識としての性格を明確にし、かつ、「資本主義的諸関係の全般的危機」を、「資本主義社会と共産主義社会との間」「帝国主義の世界独裁からプロレタリアートの世界独裁への移行」である「過渡期」と等置することにより、「危機」概念を「世界革命過程」全体にまで拡散し、上層の支配の困難と下層の政治的高揚を特殊の要件とする「革命的危機」概念と完全に切断してしまった。

第三に、第二章第四節「資本主義の安定の諸矛盾と、資本主義の革命的崩壊の不可避性」で、「全般的危機」の内容を「四大矛盾・三大革命勢力」の配置として示し、しかもその第一に「世界史的な規模と意義をもった新しい根本的な矛盾、ソ連邦と資本主義世界との矛盾」を設定することにより、「体制間矛盾主導」を明確にした。

第四に、「フランスの方法と、社会民主主義との連合の方法とは、いずれも『正常な』資本主義にとっては普通でない方法であり、資本主義の全般的危機が存在するしるしであって、ブルジョアジーが革命

の前進をおさえるために利用するものである」と明記し、かつ、「資本主義にとって最も危機的な時期には、社会民主主義そのものが、フランスの役割を演じることもまれではない」とすることによって、「全般的危機」という時代認識が、再び「革命的危機」という状況認識と結びつくことがあれば、ただちに「社会フランスム」が論理的に導出される道を拓いた。

第五に、第五章「ソ連邦におけるプロレタリアートの独裁と国際社会主義革命」において、「資本主義の全般的危機のもとで、ソ連邦が最も重大な要因となっているのは、ソ連邦が資本主義体制から離脱して、新しい社会主義経済体制の基礎をつくりだしたからだけではない。それはまた、ソ連邦が……プロレタリア革命の国際的推進力という役割、……社会主義を建設する能力をもっているという生きた実例としての役割、……世界プロレタリアートがやがてうちたてるはずの世界ソヴェト社会主義共和国連邦に結集したすべての国々の兄弟のような相互関係の原型、単一の社会主義世界経済へのすべての国々の勤労者の経済的統合の原型という役割を演じているからでもある」とすることによって、「市場問題」を「全般的危機」の基礎においたばかりでなく、ソ連邦が「国際プロレタリアートの唯一の祖国」、社会主義の「モデル」「生きた実例」であることも、「全般的危機」を根拠づける論理としてしまった。

そして、「世界綱領」を採択した第六回大会が、「第三期＝相対的安定の崩壊＝革命的高揚」という状況認識を諸テーゼにおいて採用した時、「全般的危機」論は、各国における「革命的危機」の存在を目撃のものと思わせる政治的機能を果たし、「社会フランスム」論的戦術展開を促進したのであった。

5 「全般的危機」論の過渡期における役割

しばしば「全般的危機」論の「名譽」に帰せられる「世界大恐慌の予劇」は、スターリンやコミンテル

「世界綱領」の「全般的危機」概念から導出されたものではない。一九二八年段階の「全般的危機」論が「第三期」に想定していたものは、恐慌の可能性よりも、「四大矛盾」の激化による「新たな世界戦争、とりわけソ連邦に対する干渉戦争」としての爆發なのであり、二九年に入ってヴァルガなどがアメリカにおける恐慌の可能性を予測したのとは、「全般的危機」という抽象的時代認識に依拠したことによるものではなく、むしろ、ヴァルガの主宰する世界経済・世界政治研究所が、当時の「マルクス・レーニン主義」の「一枚岩化」のもとで、「具体的情勢の具体的分析」を一手に引き受け、アメリカ資本主義の過剰蓄積を見出していたことによるものである。それは、ブルジョア経済学や当時アメリカ共産党の一部にみられた「アメリカ例外論」などに比してのマルクス主義恐慌論の優位性を示すものではあっても、「全般的危機」論の「功績」となりうるものではない。

世界恐慌期の「全般的危機」論の役割は、むしろ、「全般的危機の時代」における未曾有の恐慌の発生によって、ただちに世界中におしなべて「革命的情勢」が生じ、変革主体の成熟度がいかなるものであれ「革命的危機」に転化し、「プロレタリア独裁」が樹立されるであろう、という観念を蔓延させ、各国マルクス主義者の「具体的情勢の具体的分析」を放棄ないし遅延させた点にある。また、実践的には、フランスムの激頭を「資本主義の弱さ」の表現とのみみなして過小評価させ、「社会民主主義のフランスト化」を導出し、初期コミンテルンの「多数者獲得・統一戦線・労働者政府」の戦術を事実上放棄させ、「階級対階級・社会フランスムとの闘争・ソヴェト型のプロレタリア独裁」の左翼主義的实践に各国労働運動・革命運動を引き込む役割を、果たしたのである。

一九三四―三五年のコミンテルンの政策転換、三五年夏のコミンテルン第七回大会の「反フランスム統一戦線」の提示は、「全般的危機」論的認識枠組を無自覚的ではあるがはなれ、「具体的情勢の具体的分

析」という思考が復活することによって、はじめて可能となったものであった。⁵⁵⁾ デイミトロフやビークの報告で「資本主義の全般的危機の激化」という表現が用いられているにしても、それはもはや、二八―三三年段階の各執行委員会総会報告・決議中にみられた基軸的位置を失った、情勢分析の枕言葉、政治的宣伝用語以上の意味はもっていない。フーリン的「全般的危機」概念では保持されていた「中間層」の問題や「全生活領域の危機」は、二八年に確立される「全般的危機」論では捨象されていたから、フランスムの大衆的基盤の分析や中間層との統一戦線・人民戦線といったこの期のマルクス主義の現実的課題には、「全般的危機」論は無効であった。また、帝国主義諸国を「好戦的」フランスム諸国と「平和の維持に関心をもつ資本主義諸国」に分けて、後者をも含む「反フランスム国際統一戦線」を創るという発想は、「四大矛盾・三大革命勢力」の図式からは、生まれようがなかったのである。

- (1) 例えば、ソ連邦科学アカデミーの『経済学教科書』第一版（一九五四年）は、「資本主義の全般的危機にかんする学説の原理は、レーニンによってしめあげられた」（邦訳、合同出版、一九五五年、第二分冊、四四七頁）とし、この規定は改訂第三版（一九五九年）で一時姿を消し、第四増補改訂版（一九六二年）で再び採用された。
- (2) 邦訳『スターリン全集』第六巻、大月書店、八七―八九頁。
- (3) この点については、杉本昭七『現代帝国主義の理論』、青木書店一九六八年、二九頁以下、岡有吉郎『国際情勢の現段階』（講座『現代日本資本主義』第一巻、青木書店、一九七三年）、一六頁以下、参照。
- (4) 邦訳『レーニン全集』第三巻、大月書店、三〇七―三〇八、三四五頁以下。「帝国主義と社会主義の分裂」、同三巻、一一三頁以下。
- (5) 「帝国主義論ノート」、邦訳『レーニン全集』第三九巻、二〇六頁。
- (6) 「帝国主義論」の語アラン（岡有、一九六―二二、七二九―七三〇頁）、『帝国主義論』、および「帝国主義と社会主義の分裂」（第三三巻、一一四頁）、参照。

- (7) 邦訳『レーニン全集』第三二巻、九〇頁、第三三巻、二二〇頁、第三三巻、三三九頁、第三二巻、二二八頁、第三三巻、五二二頁、第三五巻、四九二頁、など。
- (8) 「革命的プロレタリアートのメーデー」、邦訳『レーニン全集』第二九巻、三三五頁。なお、ユ・フ・クラシン(石塚清治訳)『レーニンと現代革命』勁草書房、一九七二年、一五九頁以下、C. Buci-Glucksmann, Sur le concept de crise de l'Etat et son histoire, in N. Poulantzas (ed.), *La Crise de l'Etat*, Paris 1976, 上田耕一郎『先進国革命の理論』大月書店、一九七三年、一六〇頁以下、をも参照。
- (9) 邦訳『レーニン全集』第三二巻、二〇七―二一九頁。同第三五巻、四九一―四九二頁。
- (10) 邦訳『レーニン全集』第三二巻、七三―七四頁。
- (11) 邦訳『レーニン全集』第三五巻、四九二頁。
- (12) 「世は少なくとも、質の良いものを」、邦訳『レーニン全集』第三三巻、五二二頁。
- (13) 「共産主義インターナショナル第二回大会、同右、第三一巻、二二九頁。
- (14) 同右、五二―五三頁の「全世界の革命運動全体の循環」という把握に注意。
- (15) 上田耕一郎・飯塚繁太郎『現代危機と変革の理論』現代史出版会、一九七五年、一〇五頁。
- (16) 松葉正文『レーニンの危機認識の展開』『現代と思想』二四号、一九七六年六月、参照。
- (17) 上田耕一郎『先進国革命の理論』一二二頁、参照。
- (18) 榎野修『コミンテルンと世界経済論』(1)、北大『経済学研究』二四巻四号、参照。
- (19) 村田編訳『コミンテルン資料集』第一巻、大月書店、一九七八年、三〇、三三頁。
- (20) 同右、四八一、四〇六頁。
- (21) 同右、四三〇、四二二頁。
- (22) 同右、四三三頁。
- (23) 同右、第三巻、二八一頁。

- (24) 邦訳『レーニン全集』第三三巻、四三七頁。
- (25) 村田編訳『コミンテルン資料集』第二巻、六九、八一、一六九、三三四頁。
- (26) 同右、二八三頁。
- (27) Первый конгресс Коминтерна, Москва 1933, стр. 149. 表現は всеобщего кризиса.
- (28) *Materialien zur Frage des Programms der KI.*, Hamburg 1924, S. 205. 表現は allgemeine und tiefe wirtschaftliche gesellschaftliche und politische Krise.
- (29) 以上、N. Bucharin, Programm der KI. (Entwurf), *Internationale Presse-Korrespondenz*, 2. Jg. Nr. 222 (21. Nov. 1922), S. 1584. 訳文は、後の第五回大会草案を訳出した村田編訳『コミンテルン資料集』第三巻、七八―七九頁を参照した。傍点、引用者。
- (30) 以上については、前掲拙稿「コミンテルンの綱領問題」(1)、(1)および(2)参照。
- (31) 村田編訳『コミンテルン資料集』第三巻、七九―八〇頁。
- (32) 以上の詳細は、前掲拙稿、特に(2)、(3)五三三頁以下。
- (33) 「共産主義インターナショナルの綱領」、『日本共産党綱領集』、日本共産党中央委員会、一九六六年、一四五頁以下、参照。傍点、引用者。
- (34) この点についても、前掲拙稿、特に(2)参照。
- (35) 拙稿「世界政党と政策転換(一九三四―三五年)」、名大『法政論集』第七八―七九号、一九七九年、参照。

三 第二次世界大戦後の「全般的危機」論

1 戦後「全般的危機」論の再建

第二次世界大戦勃発当時（一九三九年）、マルクス主義者たちがこの戦争を「帝国主義国家間戦争」とみなしたのは、「四大矛盾・三大革命勢力」図式の機械的適用であった。しかし、各国の反ファシズム闘争の進展は、事実上この図式をのりこえて「中間層」や宗教者・平和主義者を含む国際統一戦線を創出し、東欧諸国の人民民主主義革命や中国革命、各国での戦後改革を可能にした。「全般的危機」論的思考を世界に広めてきたコミンテルンも一九四三年には解散し、戦後「危機」のもとでは、「社会主義へのナショナルな道」の自覚的探究がすすんでいた。

こうした動向を抑制する論理として再建されたのが、第二次世界大戦後の「全般的危機の第二段階」論である。

その端緒的成立は、一九四七年のコミンフォルム創設会議でのジダーノフ演説における、アメリカを先頭とした「帝国主義的・反民主主義的陣営」対ソ連邦を先頭とする「反帝国主義的・民主主義的陣営」の図式と、隠然たるフランス・イタリア共産党批判としての「現在、労働者階級にとって主要な危険は、自己の力の過小評価と敵の力の過大評価にある」という「中間層主要打撃」論の復活にみられた。いわゆる「冷戦体制」のソ連邦流の自己認識である。

そして、一九五二年のスターリン『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』は、戦後「全般的危機」

論の確立であり、かつ、その衰退の第一歩であった。スターリンはそこで、中国と東欧人民民主主義諸国の革命による「単一世界市場の崩壊」と「単一の強力な社会主義陣営」成立から、「世界資本主義体制の全般的危機の第二段階」を定式化し、戦後資本主義の「相対的安定」の可能性もレーニンの述べた「腐朽化のもとでの資本主義発展」の可能性をも否定し、「経済をも政治をも包括するところの世界資本主義体制の全面的な危機」という「全般的危機」の「定義」を与えた。これにもとづいて作られたソ連邦科学アカデミー『経済学教科書』（初版、一九五四年）は、①二つの「体制」の分裂と闘争、②植民地制度の危機、③「市場問題激化」による企業の慢性的遊休と大量失業、で「全般的危機」を特徴づけた。

戦後のわが国では、『資本論』『帝国主義論』に「全般的危機」論の粗述を継ぎあわせた「マルクス経済学」が盛頭し、『スターリン論文』の紹介・解説と共に、「全般的危機」論は「現代資本主義論」と等置されていった。

2 「全般的危機」論の修正と衰退

しかし、一九五三年のスターリンの死と五六年のソ連邦共産党第二〇回大会における「スターリン批判」は、「全般的危機」論にも大きな衝撃を与えた。公表された二〇回大会の「スターリン批判」の重要な論点は、スターリン的「全般的危機」論の批判であり、「二つの体制の平和共存」の問題であった。

フルシチョフの主報告が「資本主義の全般的危機が、完全な停滞、生産と技術的進歩の停止を意味する」というような考えは、マルクス・レーニン主義には無縁」と言い切り、シャピロフやミコヤンが「生産縮小説」としてスターリンを批判し、スースロフが経済学における「経典主義と教条主義」を批判して「現代資本主義のなかでおこっている諸過程の深い分析」を主張したことは、国際的にも大きな反響をよ

びおこさざるをえなかった。⁽⁵⁾ パーソンの主観主義的「危機激化」論のいましめ、リヴァイン・ロバートソンの「党派性と科学」についての問題提起、上田耕一郎氏の「いっさいの問題について、スターリン理論の克服という新しい光による理論的再検討の必要」の提唱、小坂広勝氏の「政治に対する科学研究の従風」「忘れられていた実証的研究」の真摯な自己批判、等々が現われたのは、この時期である。

しかし、「全般的危機」論そのものに即していえば、基本的にはスターリン的図式の枠内で、その部分的修正というかたちで、「自己批判」が進められた。

それは、第一に、「社会主義陣営」を「社会主義世界体制」と言いかえ、いつそう強調することにより、「帝国主義戦争の不可避性」テーゼを「平和共存」におきかえ、資本主義諸国における「社会主義への平和的移行」や植民地諸国の「非資本主義的發展」の可能性を導出したが、「体制間矛盾」主導の「四大矛盾激化」という枠組は手つかずにしていた。

第二に、「市場問題激化+慢性的過剰と大量失業」の論理が批判されて、「安定要因」としての「技術進歩」や「経済軍事化」による国内市場創出・生産力発展に目が向けられたが、「資本主義の根本的矛盾」にまで立ち返る発想は少数で、しかも、マルクス経済学内の狭い範囲での討論にとどまった。

一九六〇年のハーク国共産党・労働者党による「モスクワ声明」は、「社会主義世界体制」を「人類社会發展の決定的な要因に転化しつつある」とまでまつりあげ、「資本主義の全般的危機の發展が新しい段階に入った」と宣言した。いわゆる「第三段階」論の登場であり、ソ連邦の人口衛星の成功や旧植民地体制の崩壊を背景にしていた。そのさい、「この新しい段階の特徴は、この段階が世界戦争との関連で生じた矛盾の發展の形勢に、本質的にとまどまらしているが、これを媒介する論理は、もはや「市場問題

激化+停滞」ではなく、かつてコミンテルン「世界綱領」で「全般的危機」を基礎づけていたいま一つの論理、すなわち、「社会主義世界体制は実例によって、資本主義世界の勤労者の意識を革命化し、資本主義に反対するたたかいへとかれらをもたせ、このたたかひの条件を大いに有利にしている」という「実例による意識革命」論であった。

しかし、ソ連邦共産党を「世界共産主義運動の一般に認められた前衛」としていた「モスクワ声明」は、その後の「中ソ対立」の顕在化、それに伴う国際共産主義運動と「社会主義世界体制」内の「自主独立」傾向の進展、六八年チエコスロヴァキア事件をも一つの契機とした「エトロ・コミュニズム」の擡頭、といった展開のなかで、その「權威」を失っていった。六九年のモスクワ会議も「全般的危機の深化」「現代の三大勢力——社会主義世界体制、国際労働者階級、民族解放運動」を宣言しはしたが、日本を含むいくつかの重要な諸国の共産党は出席を拒み、また、署名を拒否した。七六年のヨーロッパ共産党・労働者党会議最終文書での「全般的危機」への言及は、「さまざまな国でさまざまな形態と規模で証明されている資本主義体制の全般的危機のよりいっそうの激化」というもので、むしろこの会議の基調である共産主義運動の多様性を、側面から浮き彫りにするものとなった。

戦後「全般的危機」論の支柱であった「社会主義世界体制」決定的要因論は、その「一攷岩」性が崩壊することにより説得力を失っていった。さらにまた、「市場問題」に代わる論拠として提出された「社会主義の実例の力」論も、中ソ対立、ワルシャワ条約軍のチエコスロヴァキア侵入、中国「文化大革命」、カンボジア「社会主義」下での虐殺とこれをも契機にした中国・ベトナム戦争、ソ連軍のアフガニスタン侵略、といった「現存する社会主義」の歴史的展開と、それらの国々における「社会主義的民主主義」の衰頹の顕在化により、色あせたものとならざるをえず、「エトロ・コミュニズム」のなかからは、「モデル」

現代世界認識の概観
II
205

ではないばかりか「反モデル」である、とする扱いきえ現われてきた。

こうして、六〇年代から七〇年代にかけて、「全般的危機」論は、世界のマルクス主義者を「統合」する世界認識としての機能を喪失し、その概念内容を失った現状分析上の枕言葉、ないし、「ソ連邦型社会主義」支持勢力の特殊な政治用語、に転化してきたのである。

3 日本型「全般的危機」論の形成

わが国マルクス主義の場合、もともとソ連邦型「マルクス・レーニン主義」の定着度が強く、「全般的危機」論が現代資本主義論と同義に扱われてきた歴史的事情により、「全般的危機」論はなお一大潮流として残されているが、「モスクワ声明」以降についていうと、ソ連邦・東欧型「全般的危機」論とは距離をおく独自の展開を示し、また、経済学のみならず、政治学、社会学、哲学などからの言及がみられるようになる。

「モスクワ声明」以降の「中ソ論争」の過程で、中国共産党は、「四大矛盾」のうちの「どれひとつも抹殺することはできませんし、また、主観的にそのうちのひとつの矛盾を他の矛盾におきかえることもできません」と述べて、ソ連邦型の「体制間矛盾主導」説を批判した。また、「モスクワ声明」の「新しい段階」規定から生まれた「第三段階」論は、「二つの体制の経済競争」に主眼をおき、帝国主義の侵略的性質を曖昧にする傾向を含んでいたため、わが国では、さまざまなニュアンスでの「全般的危機」論再検討が開始された。

その第一は、「全般的危機」論をレーニン『帝国主義論』との関連で問い直すもので、吉村正晴氏による『労働者生活状態の変化』を「階級論」であるとする著者（帝国主義論）の「特殊理論」として位置づけ、

「労働者生活状態の変化」を媒介に「二つの体制の矛盾に関する理論」を構築しようとする試み、が代表的である。また、小坂広勝氏は「生産の社会化」概念からの、手嶋正毅氏は『帝国主義論ノート』の国家群規定からの、「全般的危機」再解釈を試み、池上悳氏は「四大矛盾の資本主義的解決形態」としての「国家独占資本主義」に焦点をしばって行く。

第二に、すでに竹中明夫氏が提起していた「資本主義の基本矛盾」にまで立ち返る方向も、吉村達次氏が「生産力と生産関係」から「全般的危機」までの「上向」として示し、そこで「階級闘争の形態」を媒介すべきことを主張した。

第三に、「全般的危機」論が「万年危機」論となった経緯の反省から、「先進国革命」と関わる一国的「危機」概念の再構築の志向が生まれ、上田耕一郎氏は、「生活の危機」としての「新しい貧困化」を出発点とする、レーニン「全民族的危機」概念の再興を主張した。

そして、六〇年代後半から七〇年代に入ると、ソ連邦型の「体制間矛盾主導」による「第三段階」論はわが国では勢力を失い、またこれに対置するものとして中国で提示された「中間地帯」論・「三つの世界」論も批判されて、わが国「全般的危機」論は本格的再検討の段階に入る。

その先駆をなしたのは、杉本昭七『現代帝国主義の理論』であり、スターリン、レーニン、ソ連邦、中国の諸見解を自主的・批判的に検討し、レーニン『帝国主義論』とも従来の「全般的危機」論とも区別される「現代帝国主義論」の必要を説いた。この局面では、アメリカのベトナム侵略戦争を背景として、また「体制間矛盾主導」説への対抗から、杉本氏は「現代帝国主義論における最終段階（II表象）は、植民地・従属諸国において、帝国主義各国の矛盾とそれら相互の矛盾がいかに総合してあらわれるのか、その構造と運動とを全面的に解明する」と述べ、同様の見解は、古川哲氏にもみられた。

ここに、「四大矛盾の相互関係」という問題軸が設定された。そこで、瀬戸明氏、芝田進平氏らの「哲學的批判」が登勢することになる。

瀬戸氏は、「四大矛盾」を前提としつつ、「諸矛盾の横の連関の認識が同時に縦の、歴史的な連関のそれでもあるような弁証法の論理」を、「内的矛盾」である「三大矛盾」という「全局的矛盾」が、「体制間矛盾」という「外的矛盾」に「発展・外化」し、より高次の「全局」に対し「局部的矛盾」として内包される、と説明し、芝田氏は、「資本家階級と労働者階級の矛盾」を基底におきつつ、これに「民族間矛盾」と「世界革命過程」を媒介させて、「A 独占資本家階級と労働者階級を中心とする労働人民階級・諸階級の矛盾、B 帝国主義民族と新興民族の矛盾、C 強大帝国主義国（アメリカ帝国主義）と従属的独占資本主義の矛盾、D 帝国主義世界体制と社会主義世界体制の矛盾」という独自の「第三段階」認識を提示した。

こうした哲学者の発想は、国際政治学の研究者にも刺激を与え、第二の問題軸、「現代帝国主義」と「世界革命過程」との連関についての議論をよびおこした。その代表的論者である田北亮介氏は、「客観的な物質的基礎のレベルで内容づけられる基底矛盾」「そのレベルの矛盾に規定されながらあらわれる階級・民族・国家などのレベルで内容づけられる基本矛盾」「階級・民族・国家などのレベルの矛盾に規定されながら現象する上部構造のレベルで内容づけられる現象矛盾」という矛盾の三層把握により、「三大矛盾」を「基本矛盾」「体制間矛盾」を「現象矛盾」とし、これらは今日では「上部構造の積極的役割」に媒介されるから、「全般的危機」論は、「現代帝国主義論」プラス「現代世界革命論」であるとして、「全般的危機」の基本的指標は、革命の客観的条件のみならず、特に主体的条件が成熟し、その成熟が一定段階において顕在化せざるを得ず、したがって、この成熟の質的変化が全般的危機の諸段階を画する指標になる」と

結論づけた。田北氏は、また、「体制間矛盾」を「現象矛盾」と位置づけるにあたって、これを「第二次世界大戦中に生じた国際的フアッシュと反フアッシュ統一戦線とのあいだの対立と闘争という高度に政治的なレベルの矛盾と同様のものであって、『経済的諸矛盾の展開とその爆発』が必然的に生みだすものではなく、三つの基本矛盾が質的に高い段階で展開するという新たな歴史的條件のもとで、それに対する資本主義的解決形態としての政治・イデオロギーの結果として生みだされているもの」とし、これを、階級的・民族的契機を止揚する「人類的契機」「政治的正統性の問題」とする、かつての「実例による意識変革」論を発展させた論点を提示し、「全般的危機が第三段階へ移行するかどうかの評価は、あくまでも世界革命勢力の力の新たな質的段階における現実的定着という基本的指標にもとづかなければならない」という見地を述べた。

この第三の問題軸、ソ連邦型「第三段階」論批判は、岡倉吉彦氏においては、「いずれは（早ければ七〇年代後半にも）到来すべき全般的危機の新しい段階（ソ連など主張されているのとはちがった、其の意味での第三段階）は、高度に発達した若干の資本主義国の資本主義体制からの離脱……によって本格的に定着するであろう」という「先進国革命論」として主張され、そのさい「主体的条件があたえられている国々では革命情勢が生みだされ、現実には革命が実現されるという可能性を七〇年代ははらんでいるのではないか」と述べているように、「全般的危機」が「革命的危機」として発達した資本主義国に具現することが「第三段階」の要件とされた。

また、上田耕一郎氏は、レーニンに依拠して、「先進国革命」における資本の「危機」回避の「調整手段」①国家機構の強固さと組織性、②労働運動における日和見主義的潮流の育成、③イデオロギー的支配、④労働同盟の因襲）を析出し、「資本主義の矛盾がはげしくなるたびに段階をつぎつぎと教えること

によって、危機の具体的な分析にとりかえる「万年危機論的傾向」を批判して、逆に、「今日の全般的危機の深化も三大革命勢力の主体的対応いかんによっては、現代帝国主義による擽取と収奪の新しい再組織化、その支配の新段階を画するものとなる危険」を指摘した。

4 日本型「全般的危機」論の混迷

こうして、七〇年代には、わが国「全般的危機」論は、①「四大矛盾」の相互関係、特に「体制間矛盾」の位置、②「危機」の客観的条件と主体的条件との関係、特に政治的・イデオロギー的媒介「世界革命論・変革主体論との結合の問題」、③これらを組みこんだ「段階」規定の見直し、が進行し、また、④「新階級」に焦点をぼった研究、もあらわれてくる。

この過程で、田北亮介氏は、前述した「三大矛盾」基本矛盾論を一部修正して、「帝国主義国家間矛盾」を「体制間矛盾」と同じ「現象矛盾」のレベルに移して、「階級国家の民族国家への自己転化」「民族存続の社会主義」のもとでの諸矛盾の露呈に即して、先の「四大矛盾」論に「E 社会主義諸国間の矛盾」を加えて修正した、「五大矛盾」モデルを提示する。

他方、こうした「全般的危機」論の枠組を残した論議と併行して、⑤「全般的危機」論を理論的に再検討する作業も進行し、その創始者スターリンに求め「一国社会主義建設」と「ソ連邦擁護」を強制する論理として「全般的危機」論を拒否する傾向、フーバー「国家資本主義トラスト」論こそ「全般的危機」を根拠づけたものとして宇野弘藏「段階論」を対置する研究、コミンテルン全体の「相対的安定」

についての諸認識に内在して蓄積論的視角を復興しようとする傾向、スターリンの「全般的危機」認識の状況論的裏面を拾いあげて経済的政治的「概観図」の再興をはかる主張、「全般的危機」論は「理論」ではないとして新たな「危機論」の構築を企図する主張、各国および個々の「認識主体の実感感覚」に依拠して「自己の国際的位置に関する具体的で内在的な認識」を主張する傾向、等々が輩出しているのである。わが国「全般的危機」論が、「混沌」と評されるゆえんである。

- (1) ソ連邦M.L.研(村田昭一訳)『コミンテルンの歴史』下巻、一九七三年、一四五一―一五四頁、参照。
- (2) シタリフ『党と文化問題』国民文庫、ポツァ『コミンテルンの歴史的経緯』『世界政治資料』五一―五二号、参照。
- (3) スターリン『ソ連における社会主義の経済的諸問題』国民文庫、参照。
- (4) 前掲『経済学教科書』の他、内田義吉『一般的危機の経済学』上下、大月書店、一九四九年、大阪商大経済研究所『一般的危機と日本資本主義』蘭書房、一九四九年、神野岸一郎『世界資本主義の一般的危機』大月書店、一九五〇年、平舘利雄『一般的危機の諸問題』労働文化社、一九四九年、宮川実編『一般的危機とフランス』青木文庫、一九五二年、青木文庫版『ソ連における社会主義の経済的諸問題』への解説論文、ツルガ『帝国主義の経済と政治の基本的諸問題』上下、大月書店、一九五四年、参照。
- (5) 『ソ連共産党第二〇回大会』全四分冊、合同新報、一九五六年。
- (6) バーマン『戦後恐慌の教条主義的研究の再検討』名和誠三・玉井龍俊編『現代資本主義と恐慌』合同出版、一九五七年。リッパイン・ロバートソン『貨幣性と科学』長洲二編『現代資本主義とマルクス経済学』大月書店、一九五七年。上田耕一郎『戦後革命論争史』上下、大月書店、一九五六―五七年。小椋広勝『マルクス主義経済理論と現代資本主義研究』『思想』四〇―一頁、一九五七年一月、世界経済研究所『世界経済年報』一―号、一九五六年一月、など参照。

- (7) 前注諸文献の他、一九五七年の「社会主義国の共産党・労働者党会議の宣言」、前掲『日本共産党綱領集』所収、前掲『経済学教科書』改訂第三版、第四増補改訂版、『現代マルクス主義』Ⅱ、大月書店、一九五八年、など参照。「資本主義の根本的矛盾」に立ち返る必要を説いたのは、竹中明夫「一般的危機と資本主義の法則」(『現代マルクス主義』Ⅱ)である。
- (8) 「共産党・労働者党代表者会議の声明」、前掲『日本共産党綱領集』、参照。
- (9) 「共産党・労働者党国際会議の基本文書」、『世界政治資料』三二三号、「ヨーロッパ共産党・労働者党会議最終文書」、『世界政治資料』四八二号、参照。
- (10) 『国際共産主義運動の総路線についての論議』、外文出版社、一九六五年、六頁以下、参照。
- (11) 吉村正晴「帝国主義論と全般的危機論」、『現代帝国主義講座』第一巻、日本評論社、一九六三年。なお、同『現代資本主義の方法論にかんする一考察』、九大『産業労働研究』四二・四三号、同『現代資本主義分析の基本問題』、九大『経済学研究』三五巻三・四号、をも参照。
- (12) 小椋広勝「両体制と世界」、岩波講座『現代』第九巻、一九六四年。手嶋正敏『日本国家独占資本主義論』、有斐閣、一九六六年。池上博『国家独占資本主義論』、有斐閣、一九六五年。
- (13) 吉村達次『経済学方法論』、雄渾社、一九六六年、参照。
- (14) 上田耕一郎「現代の生活における貧困の克服」、岩波講座『現代』第一巻、一九六三年。
- (15) 杉本昭七『現代帝国主義の理論』、青木書店、一九六八年。古川哲『危機における資本主義の構造と産業循環』、有斐閣、一九七〇年、特に第五章。
- (16) 瀬戸明『国際政治と弁証法』、芝田進平『国際主義と民族主義』、いずれも『講座 マルクス主義哲学』第二巻、青木書店、一九六九年。
- (17) 田北亮介「戦後世界政治の現段階と今後の展望」、世界政治学団体研究会編『戦後世界政治の構造』、法律文化社、一九七二年、所収。

- (18) 岡倉吉志郎、前掲『国際情勢の現段階』。
- (19) 上田耕一郎『先進国革命の理論』、一〇九頁以下。同『理論政策活動の新しい前進のために』、『前掲』一九七五年一月号、一五四頁。
- (20) 杉本昭七『現代帝国主義の基本構造』、大月書店、一九七八年。
- (21) 木下世二『現代資本主義の世界体制』、岩波書店、一九八二年。
- (22) 田北亮介『現代世界政治認識の方法と理論の試み』、『科学と思想』三六号、一九八〇年四月。
- (23) 芝田進平、前掲『現代の課題』Ⅰ、一〇三頁以下。同様な「五大矛盾」論は、林直道『現代資本主義の特質』、『講座史的唯物論と現代』第四巻、青木書店、一九七八年、二二頁。
- (24) 有賀定彦『全般的危機論』の再検討、「下関商経論集」一四巻二号、一九七〇年。柳田侃『現代世界における危機の構造』、『講座マルクス主義』第一巻、日本評論社、一九七〇年。森教郎『全般的危機論における危機把握の基本視点』、『名城商学』二三巻四号、一九七四年。平田良『いわゆる全般的危機論の形成過程について』、『静岡法経短大』法経論集、三三・三三三号、一九七四年、など。
- (25) 陸旗節雄『帝国主義論の史的展開』、現代評論社、一九七二年、第七章。なお、筆者はコミンテルン「世界綱領」の「全般的危機」論は、「国家資本主義トラスト」論としては機能しえなかったと考えている(前掲拙稿「コミンテルンの綱領問題」(同、五一九一五二二頁、参照)。
- (26) 森果『相対的安定期』の分析視角、北大『経済学研究』二四巻一・二・三三三号、一九七四年。須野修『コミンテルンと世界経済論』、同誌二四巻四号、二七巻一・二・三三三号、一九七四・七七年。
- (27) 佐々木健『全般的危機論の課題』、『現代と思想』一八号、一九七四年。同『全般的危機論の方法』、原田三郎編『資本主義と国家』、ミネルヴァ書房、一九七五年。
- (28) 柳本園弘『危機論考察のために』、『岐阜経済大学論集』第一〇巻一・二二二号、一九七六年。同『危機論の基本視点』、『現代と思想』二四号、一九七六年。

四 「全般的危機」論の問題点とマルクス主義の今日的課題

以上の概観から析出しうる「全般的危機」論に内在する諸問題を、マルクス主義の今日的課題との対比で、最後に検討しておこう。

第一に、「全般的危機」論は、第一次世界大戦とロシア革命の勝利を経て、戦後「革命的危機」が去り「資本主義の相対的安定」が明らかになってきた時期に、「世界革命」をめざす「単一世界政党」として世界全体を認識と変革の対象とせざるをえない、コミンテルンの時代認識として、定立された。その枠組は、ブハーリンにより与えられ、スターリンによる修正を経て、コミンテルン「世界綱領」で確立された後、コミンテルン、コミンフォルム、その後の国際共産主義運動の「公認」世界像として採用されたが、世界史そのものと国際共産主義運動の新たな展開により、その含意を変遷させてきた。

現代マルクス主義の対象は、「現存する社会主義」をも含む人間社会の総体であり、その立脚点は、国際共産主義運動をも含むがそれよりはるかに広い、諸個人の労働と生活の全過程である。そこでは、「全般的危機」論の視野には入りえない「人類進歩」に関わるあらゆる問題が、世界像構築の素材として射影に入る。「科学技術革命」「自然環境破壊」「核兵器体系」など人類的「生産力」と「破壊力」の問題、この「生産力」と関わる「都市と農村」の世界的「分業」、この「分業」の内容を成す産業―経営―諸個人の労働時間や民族―地域―家族の生活時間、その結果としての「富と貧困」の世界的偏在、これらは「人類」的視角から、あらためて対象化を要請される。そのさい、「精神的生産」「自由時間と労働時間の弁証法」

と関わる諸個人の生産―変革主体としての個性的形成度が、「公共的交通」、すなわち諸個人の人間的社会へのコミニケイティブな能動的「参加」の本準として、「人類」的スケールでの「民主主義」の問題となる。こうした視角から、「現存する社会主義」を含む人類社会の到達点が測定される。このレベルでかけられる変革勢力の「正統性」獲得の目標は、「全般的危機」論の想定した「世界戦争―世界革命―プロレタリアートの世界独裁」との対比でいえば、「諸個人の個性的人間解放―国家の死滅―社会への再吸収―恒久平和」である。

第二に、時代認識としての「資本主義の全般的危機」の含意する内容は、結局のところ、資本主義から「社会主義」への世界史的「過渡期」ないし「移行期」と同義であり、この「社会主義」を「プロレタリア独裁―社会主義国家樹立」の本準で捉えて、その「資本主義の危機」への反照―規定を当然視するものであった。当初はそれが、「来たるべき不可避の世界戦争」までのタイム・スパンで期待されていたが、資本主義の「延命」により、「段階」規定を設けざるをえなくなったのである。

マルクス主義の今日的視角においても、「資本主義の危機」の諸相は、それぞれの問題領域―生活領域で具体的に検出されるが、「全般的危機」規定の果たしてきた政治的・イデオロギイ的機能の問題性に着目すれば、「過渡期」ないし「移行期」規定の方が、時代認識によさわしいであろう。しかし、ここでの「過渡期」ないし「移行期」は、前述した「人類」的視角による「共産主義への過渡期」ないし「解放された諸個人の連合社会への移行期」としてまず理解するべきであり、資本主義的私的所有の揚棄は、その中核的一環を成すが、あくまでその一階梯―要素であり、「国家」を強化させつつある「現存する社会主義」に「初期社会主義」「幼年期」「生成期」等と呼ばれる新たな「段階」規定を設ける試みも、こうしたメルクマール移行（社会主義―共産主義）への自覚的・無自覚的接近なのである。

第三に、世界像としての「全般的危機」論とは、世界を「四大矛盾」による構成で把握する認識枠組である。ブハーリンによる定立当初は「帝国主義の三大矛盾」であったが、スターリンが「体制間矛盾」を加えこれを基軸に再構成することにより、「社会主義世界体制」主導型の世界認識となった。

この「矛盾論」的世界把握は、「国家」を単位とした世界の対象区分には「便利」であるが、それ自体としては何ら世界史の発展行程を説明するものではない。それゆえに、「四大矛盾」の中に「根本矛盾」を設定したり、「四大矛盾」という経済主義的規定の即自的な政治的反射としての「三大革命勢力」に順位をつけたりする発想も、生まれてきたのである。また「矛盾論」的把握を採るとすれば、例えばエンゲルスの「資本主義的生産様式に内在する矛盾」(①社会的生産と資本主義的領有、その「現象形態」としての②プロレタリアートとブルジョアジーとの対立、③個々の工場内での生産の組織性と全社会における生産の無政府性)や、既述したレーニン「資本主義の三つの矛盾」(①社会的生産と私的占有、②富と貧困、③都市と農村)と「帝国主義の三大矛盾」ないし「全般的危機の四大矛盾」との論理的関係が、ただちに問題となるが、こうした問題の所在にさえ、「全般的危機」論は長く無自覚であった。

今日の段階では、この「矛盾論」的世界把握そのものの有効性と限界が、検討されなければならない。すなわち、出発点「根本矛盾」を「社会的生産と私的所有」におきかえたとしても、「私的所有」揚棄過程での「社会的生産」に内在する諸問題が特殊に明らかにされない限り、「現存する社会主義」の問題も「移行期」の発展行程も、世界像から欠落してくる。また、「国際労働者階級」があらためて「第一革命勢力」と再構定されるにしても、この「労働者階級」の生産⇌変革主体への形成の論理は独自の問題として残され、「国家—政党—労働組合等の諸政治組織—労働者階級を構成する諸個人」の諸関係の「全般的危機」論とは異なる国際的構成が理論的課題となる。

第四に、「全般的危機⇌四大矛盾の激化」の理論的基礎づけは、ブハーリンにおいては①「国家資本主義トラスティ」論であり、スターリンの場合は②「市場問題⇌資本主義世界市場の空間的狭隘化」とされ、コミンテルン「綱領」が③を採用し④「社会主義の実例の力」を加えて、この②③が長く「危機」の根拠とされてきた。また、「全般的危機」の内容は、ブハーリンにおいては文字通りの「全生活領域の危機」「文明の危機」であり、スターリンにおいても「経済も政治も包括する」と説明されてきた。「四大矛盾」とは、本来は、この「全般的危機」の原因と結果とを媒介するものであった。

しかし、①は一九二九年段階でブハーリンの「右翼的偏向」の理論的典型とされ、②は第二次世界大戦後の資本主義発展の事実により破産を宣告され、政治的・イデオロギイ的相面の問題である③も、今日ではむしろ、「現存する社会主義」の「実例の力」として、発達した資本主義諸国での変革の阻害要因となっている。ここから、一方で、④レーニン「帝国主義論」にさかのぼったり、⑤「国家独占資本主義論」や「新帝国主義モデル」など新しい視角で、「世界資本主義の構造的危機」を根拠づけようとする経済学者たちの努力が生まれ、他方、「危機」はあくまで政治的・イデオロギイ的相面で検証される「政治的正統性」の問題ではないか、とする政治学者や社会学者の疑念が生まれてきた。そして、経済学的「危機論」には「還元主義」の危険が付きまとい、政治学的・社会的「全般的危機」論からは「万年危機」論のイメージが払拭されない。「全般的危機論⇌現代帝国主義論⇌現代世界革命論」という提言は、こうした欠陥を補うものとして示されたが、こうなると結局「現代世界⇌社会論」そのものであり、ますますなぜ「危機論」たりうるかが問われることになる。

要するに、「全般的危機」論とは、現代資本主義の構造から「全生活領域の危機」へいたる全メカニズムを、「四大矛盾」というわかりやすいが単純なモデルを媒介することにより、一元的に説明しようとする

るものなのである。「教条主義」と「政治への従属」から「解放」された現代マルクス主義が、「泥池」を経て「全般的危機」論批判へと向かいつつあるのは、マルクス主義の生命線である現実的諸連関の批判的説明、「具体的情勢の具体的分析」の復権、という新たな発展の総過程における「エピソード」なのである。

第五に、「現代帝国主義論」と「現代世界革命論」の媒介環たる任を負わされた「四大矛盾」論の内部に立ち入ってみると、前述したように、「体制間矛盾主導」説がほぼ半世紀にわたり受容され、「全般的危機」論者の中では今日でも国際的通説である。

この「体制間矛盾主導」説は、ソ連邦をはじめとした「現存する社会主義」を無矛盾なものともみなし、資本主義世界の労働者・人民に無条件的支持を強制し、「実例の力」論に媒介されて、「モデル化」を促進してきた。「スターリン粛清」をはじめとした「現存する社会主義」の問題をマルクス主義者が対象化しえなかった理由の一端も、ここに存する。

第二次世界大戦後の「全般的危機」論は、「社会主義体制（ソ連邦）」から出発して、「社会主義陣営（政治的共同体）」→「社会主義世界体制（政治的・経済的共同体）」→「社会主義体制（経済制度）」ないし「社会主義諸国（政治制度）」とそのイメージを修正することで問題を糊塗してきたが、戦争さえ惹起する現実の前に「第五矛盾」社会主義国家間」説さえ登場せざるをえなかった。日本型「全般的危機」論は、「体制間矛盾」外的矛盾」説でソバーリン的「三大矛盾」説への回帰をはかったが、そもそも「世界革命」をめざす「世界政変」であったコミンテルンの伝統においては、「四大矛盾」はすべて「内的矛盾」であったのであり、この理論的修正は、日本マルクス主義の「自主独立」の自覚化の指標ではあるが、「三大矛盾」内的矛盾」説自体の問題は依然として残される。前述した「資本主義の矛盾」一般と「帝国主義段階の三大矛盾」との連関は、その一例にすぎない。

「三大矛盾」論は、①階級間②民族間③国家間という次元の異なる諸矛盾を同列に扱い、帝国主義国家内は①、植民地・従属国②後進諸国は②、帝国主義国家間は③で扱う傾向をもち、帝国主義国家内の民族問題や帝国主義諸国家間の従属的同盟、後進諸国内の階級的対立を抽象したイメージを与えてきた。また、総じて「中間層」や「国家形態」の問題は欠落する傾向を内在させていた。

そして、「全般的危機」論の歴史的展開において支配的だったのは、「体制間矛盾」に、②帝国主義植民地の「民族間矛盾」、③帝国主義「国家間矛盾」を加えた「国家」の次元で国際関係的に「危機」を説き、帝国主義国家内の①「階級間矛盾」激化を自動崩壊論的に導く手法であった。「体制間矛盾主導」説から脱した日本型「全般的危機」論が、六〇年代後半にベトナム解放闘争を背景に一時「民族間矛盾」基軸説に傾斜し、七〇年代には「先進国革命」階級矛盾主導」へと転換してきたのは、右の論理的欠陥と関連している。また、芝田進牛氏が「資本-賃労働」を基底として「五大矛盾」の各歴史的現象形態を問題としたり、田北亮介氏が①階級と②民族を等価的な「基本矛盾」として「現象矛盾」へと上向したりしたのは、「全般的危機」論が、①階級②民族③国家の三階層の関係を論理的に明示しえない限りでは「理論」たりえないことからの脱却の試みであった。

現代のマルクス主義は、これら三階層を含むカテゴリー系列「史的唯物論の理論体系」の総体を問題としているのであり、「階級対立」も「民族矛盾」も解決したとされる「現存する社会主義」（体制）における「国家」間戦争をも対象化するような理論構築が期待されているのである。また、「全般的危機」が強調される時ほど「中間層」や「国家形態」や「社会主義へのナショナルな道」の解明が後退して、「統一戦線・人民戦線」的発想や「具体的情勢の具体的分析」がおろそかにされた経緯から、「自然環境保護」や「核兵器廃絶」「平和」の運動、「反アパシズム」闘争や婦人解放運動、地域住民運動などをも基礎

づけるような理論の構築が課題となっているのである。

そもそも「四大矛盾」「三大革命勢力」図式は、「プロレタリアートの世界独裁」「ソヴェト社会主義共和国世界連邦」への全人類の「一統化」を想定してつくられたものであり、「民主主義」の人類史的意義は把握しえないように構成された理論枠組なのであった。

最後に、時代認識「世界像としての「全般的危機」論が、そもそも「危機論」として成立しうるか、という根本問題が残される。「全般的危機」という術語が、西ヨーロッパの「革命的危機」状況の現存在を基礎に唱えられ、「相対的安定」のもとで時代認識として自立したことは、すでに述べた通りである。また、「全般的危機」概念の歴史的確立が、世界恐慌下で各国「革命的危機」を観念的に想定させ「左翼主義」的運動を招いたことも、歴史的事実である。

もともと「機動戦」的状况を想定した「革命的危機」概念が、「全般的危機」という時代認識として自立する時、この時代認識にもとづいてあれこれの「危機」状況の徴候を詮索する志向が生まれ、「安定要因」や「調整手段」、繼して資本主義の「延命現象」が看過されがちなことは、当然である。また、世界的規模での「危機」が、各国での「革命的危機」の現存と切断されて概念化されると、世界資本主義の部分的困難（それは他の部分での成功でもありうる）やあれこれの国の政治的高揚が、おしなべて世界全体に波及するべきものとしてイメージされることも、おおいにありうることである。さらに、この「危機」は「全般的」であるから「土台」である経済的「危機」を直ちに政治的・イデオロギー的相面へと直結させる、経済主義的・還元主義的思考を促進することもまちがいない。「全般的危機」論に、「慢性的危機」「万年危機」の「断末魔的イメージ」がつきまとうのは「攻勢理論」の立場からフーバーが概念化して以来、半世紀以上にわたる本質的質性なのである。

この一つの理由からしても、「全般的危機」論は、再検討され批判されるべき十分な根拠をもっている。しかし、ここから一国的・状況的・主体的なレーニンの「革命的危機」概念を復活するだけでは、問題の解決にはならないであろう。むしろそれは、今日的な「革命」のあり方に関わるものであり、発達した資本主義国での「陣地戦」的変革に関わる「危機論」は、レーニンの「上層の危機」と「下層の政治化」による「旧国家機構の粉碎」の場合とは異なり、「国家の危機」として理論化されるべきであろうと思われる。

これまでみてきた「全般的危機」論の歴史的展開は、時代認識「世界像」のあり方や「危機論」の意義にとどまらず、マルクス主義理論の今日的あり方の問題をも示唆している。日本のマルクス主義がここからどのような教訓を導き出しうるか？ この問題は、日本と世界の変革の展望とも、深奥において結びついている、と思われるのである。

- (1) 本書Iは、この点を〈政治〉概念の問題として展開しておいた。
- (2) 本書V、参照。